

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 16 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530782

研究課題名(和文) 地域社会の社会心理学

研究課題名(英文) A social psychological study of local community

研究代表者

辻本 昌弘 (TSUJIMOTO, Masahiro)

東北大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90347972

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アルゼンチンの日系人および沖縄諸島の人々を対象とする地域研究の集大成を図った。研究の主要な成果は以下の3点である。第一に、20世紀前半におけるアルゼンチン日系人のエスニシティの諸相を明らかにした。第二に、アルゼンチン日系人や沖縄諸島の人々が結成する互助集団にみられる助け合いのメカニズムを理論的に総括した。第三に、沖縄からアルゼンチンに移住した日系人の生活史研究を刊行した。

研究成果の概要(英文)：Based on the results of field research in Argentina and Japan, this study examined the following three issues: (1) We elucidated the everyday lives and experiences of the Japanese who lived around Buenos Aires during the first half of the 20th century. (2) I conducted a comprehensive analysis of traditional mutual aid associations of the Japanese in Argentina and the people in Okinawa (islands southwest of Japan). (3) I completed life history study of a Japanese who migrated from Okinawa to Argentina.

研究分野：社会心理学

キーワード：生活史 エスニシティ 社会的交換

1. 研究開始当初の背景

本研究では、研究代表者が国内外でこれまでに実施してきた地域研究の集大成を図った。

研究代表者が研究の対象としてきたのは、南米の日系人（日本からの移民とその子孫）および沖縄諸島出身者である。

1994 年以來、アルゼンチン、ポリビア、ブラジルなど南米各地で日系人を対象とした現地調査を実施してきた。とくに重点をおいた調査地はアルゼンチンのブエノスアイレスである。

アルゼンチン日系人のかなりは沖縄系であるので、研究代表者の日系人研究は沖縄と深い関わりがある。研究をいっそう深化させるために、2003 年から沖縄諸島での現地調査もくり返し実施してきた。

以上の現地調査により蓄積してきた資料は膨大な量にのぼる。これらの資料の分析および研究成果の発信を目指して本研究を立案した。

2. 研究の目的

(1) エスニシティ

第一の目的は、アルゼンチン日系人のエスニシティについて考察することである。

南米には、さまざまな民族が流入し、多民族社会が形成されてきた歴史がある。多民族社会では、民族を基準として内集団と外集団が峻別され、特徴ある民族間関係が生じたり、民族的なアイデンティティが活性化したりする。

本研究では、歴史的・社会的背景を踏まえて、アルゼンチン日系人のエスニシティの諸相を明らかにすることを試みた。

(2) 社会的交換

第二の目的は、講集団 (rotating savings and credit association) にみられる協力行動の発生メカニズムを、幅広い理論的文脈に位置づけて総括することである。

講集団とは、数十人の参加者で資金を交換し助け合う伝統的慣習である。日本では頼母子講、無尽、模合などと呼ばれている。アルゼンチン日系人や沖縄諸島の人々には、講集団を活用して困難を乗り越えてきた人がかなりいる。

これまで研究代表者が論じてきた講集団の知見のうち、考察が不十分だった点に精密な再検討をくわえ、理論的総括を図った。

(3) 生活史

第三の目的は、これまでの現地調査で収集してきた生活史資料を分析し刊行することである。

ここでいう生活史研究とは、インタビュー調査などをもとに、個人の人生史と社会の時代史を有機的に関連づけて分析する手法のことである。

これまで収集してきた沖縄出身移民のイ

ンタビュー資料には、琉球処分以降の沖縄と本土との関係、貧困から逃れんと南米に渡った一族の歴史、南米で日系人として生きる意味など、近代史の証言ともいべき語りが含まれている。このような語りに注目して、人生史の細部から近代史をあぶり出すとともに、近代史を踏まえて一人の人間の人生史を解釈するという、巨視的水準と微視的水準を往還する分析を行った。あわせて、生活史研究の新たな方法論の開拓を試みた。

3. 研究の方法

これまでの現地調査ですでに相当量の資料を収集している。本研究では、力点を現地調査から資料分析に移した。上述の3つの目的に対応させながら方法の概略を述べる。

(1) エスニシティ

アルゼンチン日系人を対象に実施してきたインタビュー記録の多面的な分析を進めた。またアルゼンチン日系人が刊行してきた文書資料（新聞、雑誌、移民史など）を分析した。

(2) 社会的交換

講集団研究を幅広い理論的文脈に位置づけて総括するために、集合行為論、社会関係資本論、フリーライダー問題などに関する理論的知見と、講集団についてこれまで得られてきた知見を照合する分析を行った。それをもとに、講集団における協力行動の発生メカニズムを理論的にモデル化する作業を進めた。

(3) 生活史

これまでの調査で蓄積してきたインタビュー資料（いわゆる逐語録）の分析と、生活史の背景資料となる文書資料の収集を行った。とくにインテンシブな生活史の聞き取りができていた事例については、一人の人生全体を包括する生活史研究を行った。

また新たな生活史研究にも着手し、インテンシブなインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

(1) エスニシティ

日本からアルゼンチンへの移住は20世紀初頭からはじまり20世紀半ばまで続いた。本研究では、20世紀前半のブエノスアイレスを中心に、アルゼンチン日系人の生活と体験を明らかにした。

戦前生まれの日系二世（移住した日本人の子ども）に対する調査から得られたインタビュー資料および各種の文書資料を総合的に解釈する作業を行い、その知見を論文として発表した。知見の概要は以下のとおりである。

戦前の移民の多くは、金を蓄えたら日本に帰国するつもりだったといわれる。しかし、多くの移民は帰国を果たせなかった。かなりの戦前移民は貧困と格闘し「日本に帰るのが

否か」をめぐって紆余曲折をくり返したと考えられる。

日常生活において、日系人は周囲からしばしば「日本人」と呼ばれるが、戦前の二世にとって日本は想像上の曖昧な存在だった。

日系人はアルゼンチン社会から排斥されておらず、非日系人と親密な関係をつくっている日系人も多い。ただし、ヨーロッパ系住民が多い都市部で生育した二世のなかには、アジア系の風貌からくる疎外感について語る者もいる。

日系人は、アルゼンチン社会で正直・勤勉といった肯定的評価を得ているといわれるが、肯定的評価は時期と状況によりさまざまな意味を帯びていた可能性がある。

以上のような20世紀前半の日系人の生活と体験は、20世紀後半のそれとは大きく異なる。20世紀後半になると、日本は経済的発展を遂げ、南米の日系人が日本に行き就労するようになった。エスニシティのあり方は時代状況と密接に関わっている。

(2) 社会的交換

豊富な資金をもたず徒手空拳でアルゼンチンに渡った移民は、自営業の起業や天災への対処などに際して講集団を活用してきた。しかし、講集団は役立つばかりではない。講集団には脆弱性があり、非協力行動（資金の不払い）が発生して参加者が損害を被ることもある。講集団の脆弱性は、理論的にはフリーライダー問題に対応するものである。

本研究では、これまでの研究で明らかにしてきたアルゼンチン日系人および沖縄の講集団の知見について理論的総括を行い、濃密な人間関係をつくり助け合いを実現する講集団のメカニズムを解明した。その概要は以下のとおりである。

講集団には、面識関係にもとづく参加者選抜により資金交換の脆弱性を克服し、翻って資金交換にともなう自己束縛により面識関係の脆弱性を克服するという円環的構図がある。幅広い理論的文脈に位置づけると、この構図の の部分は、濃密な人間関係のなかに社会的交換を埋め込むことにより非協力行動の発生を抑制するというものであり、集合行為論や社会関係資本論において論じられてきた「埋め込みアプローチ」に対応する。一方、 の部分は、そもそも濃密な人間関係が存在しうるのはなぜかという問いに迫ったものであり、そのひとつの答えとして自己束縛のメカニズムを示した。

あわせて講集団のような伝統的慣習を研究することの実践的意義についても検討した。講集団を研究する実践的意義は、講集団を普及させることにあるのではなく、助け合いを実現する方法を各人が創造する一助になることにある。たとえば、講集団とは無縁だった人々が、講集団のメカニズムを知ることによって、新たな着想が得られる可能性がある。あるいは講集団の脆弱性を知ることが、失敗

を避けるうえで役立つ可能性もある。講集団のような伝統的慣習を研究する意義は、普及させることでも復活させることでもなく、新たな問題解決策を人々が創造するためのヒントになることにある。

(3) 生活史

生活史研究にかかわる主要な成果は以下の3つである。

これまでの調査で蓄積してきたインタビュー記録や文書資料の精密な分析を行い、その成果を著作として公表した。

また、これまで収集してきた生活史資料をもとに、連鎖移住、同郷集団、互助集団などにみられる「自分たちの適応環境を自分たちでつくる」という移民の適応プロセスについて考察を行った。

生活史研究の方法論について検討を進め、学会等での報告を行った。

移民の生活史を解釈する際には、複数の文化からの影響という観点が重視されやすいが、人生の可能性を学ぶという観点もあることを提案した。移民のなかには、時代史（たとえば貧困、国民国家の作用、総力戦争など）に翻弄されながらも、みずからの人生を切り拓いていった者がいる。複数の文化からの影響という解釈だけでなく、日常生活の細部のエピソードを生かしながら、人生の可能性をめぐる多様な解釈に開かれた生活史を編集・作成することの重要性を指摘した。

また、生活史研究の一般的な意義についても検討をくわえた。生活史研究には、従来から指摘されてきた個人の理解のみならず、文化や国家をめぐる既成の抽象的観念を揺るがし新たな見方を提案する意義があること、さらに、そういった意義を十全に生かすための生活史研究の具体的手続きについて、研究会報告を行った。

生活史研究をいっそう深化・発展させることができる可能性がみえてきたことから、新たな生活史研究に着手した。

沖縄諸島出身者を対象としたインテンシブなインタビュー調査をくり返し実施するとともに、得られたインタビュー資料を解釈するうえで必要となる文書資料の収集を進めた。

これらの調査により蓄積したインタビュー資料および文書資料は相当な量にのぼっており、今後、慎重に分析を進める予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

辻本 昌弘・KUDA Alejandro、アルゼンチン日系人の生活と体験：20世紀前半のブエノスアイレスを中心に、文化、76、2012年、1-22

頁、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

辻本 昌弘、生活史研究の方法論：移民の口述を例に、東北心理学会第 67 回大会、2013 年 5 月 11 日、東北工業大学（宮城県仙台市）

〔図書〕(計 2 件)

辻本 昌弘、語り 移動の近代を生きるあるアルゼンチン移民の肖像、新曜社、2013 年、222 頁

辻本 昌弘、マイノリティと不平等：困難を生きる技法、佐藤嘉倫・木村敏明（編）不平等生成メカニズムの解明：格差・階層・公正、ミネルヴァ書房、2013 年、139-160 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻本 昌弘 (TSUJIMOTO Masahiro)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：9 0 3 4 7 9 7 2

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：